

西村天囚居士評撰

西村天囚居士評撰

聞怨

全

東雲堂本舖發兌

本問文庫
文庫 14
D 48

70

65

60

55





文庫14
D48

以詩代序



斗一變 物化角小
詩風流 落 淡生涯
尊前 揮研 惜 姬

立首獨細評聞
怨何

天月居士



聾評閨怨緒言

一予溺於文詩有年矣。然於狹斜歌謠實未有聞焉。今茲秋經中山道至名古屋。駐杖十日。此地素名區。娼閣連蔓。旗亭挾路。花笑柳語。歌吹四起。予憐山憐水。情繫雲烟。而頓出天嬌柔媚之境。眼眩紅綠。耳聾嘈囂。不知所欲言。會書賈東雲堂乞予著書。嗚呼。余講六經乎。人以爲迂。作稗史乎。奈客次匆匆。何。乃敢試把教坊所唱閨怨詞評之。實未有聞。而言其抑揚。何異聾者評聲曲。因名曰聾評閨怨。

一俚謠多自古歌俳句及謠曲院本脫胎來。或有直

用其語者。今予竊旅。手有一枝之筆。而案無半卷之書。不能一々參証。以探其源委。此爲遺憾。且夫世之歌謠辭巧意婉者何限。而予已聾於此。所聞不少。故其採錄亦不過寥寥。存于胸臆者。他日得醫聲。當重選細評。以出續篇。乞諒此意。

一文詩與歌謠聲調固殊。而趣致略同。故以讀文詩之心。移于評歌謠之眼。則庶幾中肯綮。歟。但文詩自學識來。議論叙事變化自在。歌謠直言中情。婦幼亦可做得。其微妙在此。而萬篇一律之病亦在此。是其所以異科也。若夫閨怨之詞。以柔情綺語。勝往々有不經者。此編欲收情韻兩備者。而不得。

恐有薰蕕並採之嫌。然是實不得已者。予曷辭天下木強漢之尤哉。韓內翰自序其香奩集曰。若有責其不經。亦望以功掩過。賴山陽游長崎。作綺語。杏叔讓之。乃作詩自解曰。孤衾如水。已三年。予乞於此編。亦借二公之言。以爲一篇之解嘲矣。

一予此行與山內愚仙同游。愚仙巧于洋畫。及此編成。乞作邦畫。挿之卷中。以資看官之清娛。予輩將經京攝觀九州之山水。游心匆忙。此編脫稿。不逮見印刷成。而飄然上程。故托校字於他人。不保粗漏。烟霞痼疾。或成後悔。乞恕焉。

明治戊子秋抄於名古屋得月樓上

評雙 閨怨目次

春

袖香爐

御所車

春雨

行暮て

梅にも春

むつとちて

花の曇る

夏

落し文

こすの戸

夕顔

獨寐に

戀しく

一聲り

秋

袖乃露

菊乃露

秋の夜

霧の雨

萩桔梗

時雨ふる

浮世捨て

君來すは

冬

雪

黒髪

我物

枯ほそる

雑

四の袖

玉川の水

鬢のほつれ

雪は月夜

ほんゝ思へば

別集

山姥

黒木賣

傾城無間鐘

山賤

高尾殲悔

燕子花

秋の巢籠

染絲

合計三十八首以上



評龔 閨怨

春

袖香爐



天囚居士評選

春の夜の月は何やる、それりとよ。香やはりく

る。梅のほな。春月朦朧。如有意而然者。獨門前籬落之梅。假令

光。ちれど、ほりは猶のおる。花孰不落。而餘香滿泥。

た。もとよきやらのけむささつ。くおし。えと。

そ。のかひもなき玉衣。双袂蓄香。馥郁外聞。十襲愛惜。亦無

麗。形容太巧。不稱其色。而取其香。以は。ん。ま。あ。之。語。婉。有。

味。柳。の。み。どり。紅。の。は。な。を。見。て。、。り。へ。る。鴈。開。柳。眼。

垂。綠。絲。花。蕾。綻。而。織。紅。錦。正。是。天。地。鐘。美。好。時。節。獨。鴻。雁。何。心。負。此。好。光。而。南。歸。也。秀。句。如。繡。娟。麗。無。匹。

春燕負月而去。秋雁負花而歸。燕之與雁豈有意于花月哉。風人遇爭綠競紅時節。見物皆媚人。皆喜直賦其事。索然無味。於是不言愛賞不措者。而言負花而去者。春光活動裏面。極反映襯射之妙。詩文之巧在此。不可不知。○前段說其香。姘々。末一句言色。故詞不浮艷。此等歌。匆々誦去。不覺其妙。仔細玩味。始知用意周到。

御所車

香。に。ま。よ。ふ。梅。が。軒。端。の。勾。どり。嬌。鶯。尋。芳。猶。一。姘。童。少。艾。相。求。相。喜。此。一。篇。總。是。
興。は。な。に。あ。ふ。せ。と。ま。つ。年。れ。桃。之。天。々。其。葉。蒸。々。斯。子。將。嫁。之。時。痴。心。觸。物。動。盪。
何。に。て。う。れ。し。き。け。そ。う。ふ。み。將。言。此。一。句。先。借。物。起。來。始。入。本。題。層。々。相。承。成。下。
文。許。多。姿。態。何。等。筆。致。○ひ。く。初。音。れ。迎。歲。與。開。函。自。然。湊。合。○
聲。一。句。是。比。ま。ど。と。け。か。ぬ。る。う。す。で。り。春。來。冰。未。解。猶。有。隔。靴。搔。
評。卷。之。感。願。他。渙。然。解。疑。而。有。未。釋。然。者。○痒。之。感。願。他。渙。然。解。疑。而。有。未。釋。然。者。○
深。草。の。比。雪。字。直。承。冰。字。雪。深。與。思。深。對。も。よ。も。か。よ。ふ。こ。深。草。少。將。心。醉。小。町。風。雷。雨。夜。立。其。門。九。十。九。夜。未。
ひ。の。や。と。み。が。な。さ。け。を。か。ね。の。と。こ。に。ま。く。ら。言。自。家。之。さ。み。が。な。さ。け。を。か。ね。の。と。こ。に。ま。く。ら。

り。た。く。夜。も。す。が。ら。
 真情遂不可得乎。希得假寐以相逢。少年痴心夢想。往々有如此者。
 柔聲曼調。悠然起。脩焉止。有興有比。有比而興者。中引典故。局段自高。其妙尤在字句轉接之巧。輕々不費力。豈殊言其語綺辭麗哉。嗚呼。古人思想之巧。緻何以然也。○春來冰未解。言兩情未釋然。已。胚。胎。下。文。深。草。故。事。勿。輕。々。看。過。

四



春雨

春雨に。し。つ。ほ。そ。ぬ。る。鶯の羽。かせ。に。ほ。ふ。梅。が。香。や。春。雨。霏。々。鶯。羽。盡。濕。無。端。一。拂。忽。送。香。風。花。に。た。は。む。れ。し。ほ。ら。し。や。如。聞。鶯。婉。婉。轉。于。小。と。り。で。さ。へ。も。疎。影。暗。香。之。中。

一す。と。に。ね。ぐ。ら。さ。ど。め。の。木。は。一。つ。小。鳥。猶。且。有。定。栖。人。可。不。鳥。如。

手。健。羨。之。碎。却。是。希。望。わ。た。し。や。う。ぐ。ひ。そ。ぬ。志。は。梅。是。妾。之。意。木。與。氣。邦。音。通。

鶯。郎。是。梅。言。自。家。交。情。之。密。語。氣。悠。揚。自。是。得。意。蓋。斯。子。蘂。海。羈。絆。之。身。猶。籠。中。之。鶯。故。前。段。羨。花。間。婉。轉。之。鶯。下。有。待。時。之。語。

や。が。て。身。ま。ゝ。氣。ま。ゝ。よ。な。る。な。ら。バ。サ。ア。幸。多。艱。苦。希。望。慰。藉。如。拭。鶯。宿。梅。ト。や。な。い。か。い。か。い。か。サ。ア。サ。あ。ん。で。

も。よ。い。わ。い。な。鶯。宿。梅。三。字。結。得。飽。足。無。憾。

感慨所係。莫若節物焉。佳人開窓見黃鶯戲于雨中。花間而慨。身繫情海。動不。如意。喟然長吟。成此一篇。其辭流麗。而不。悽咽者。以。不言。今之艱苦。而希後之快樂也。讀去求。意匠於文字之表。却是慘澹。嗚咽。有。如。聞。哀。猿。悲。雁。者。

行暮て

ゆ。死。く。れ。て。木。の。下。影。を。や。ど。せ。は。借。得。古。歌。を。ら。に。

一。ら。れ。ぬ。ゆ。き。づ。ち。る。綺。麗。は。な。乃。ま。く。ら。に。ふ。
 きの。し。と。ね。可。婉。致。よ。く。や。あ。ら。し。此。あ。て。も。と。と。聞。
 て。な。が。し。の。花。此。枝。岑。鳥。出。花。ほ。ん。に。男。乃。氣。ば。か。を。
 く。ん。て。意。猶。疑。未。滿。情。郎。一。夜。の。そ。の。い。ぶ。し。も。い。
 ふ。に。は。い。や。ま。さ。る。勿。言。勿。言。は。あ。や。今。宵。の。あ。る。お。
 な。ら。ま。し。亦。以。古。歌。末。句。言。則。淺。は。あ。や。今。宵。の。あ。る。お。
結。餘。情。欲。流

淫奔之歌其調自浮予獨取其辞之婉麗。

梅にも春

梅にも春此色ろへて春風滿地無物不芳若みづくむか車井
 の音もせわしれ鳥おひや新禧氣象溢于千門萬戸中あさ日に
 しけき人影ともしやとおもふ戀のよく勿忙中猶不脱一點
情遠音かぐさや數とそれまつ辻占やねすみな
思心不何ふてうれおれさ、さけん始遇
在斯

新年之歌意樂調揚洋々乎箇々自得不負太平
 之春矣

むつとして

む。は。と。し。て。か。へ。れ。ば。門。の。青。柳。乃。惠風解怒。况綠柳之

實風流温藉之致。天く。も。り。し。む。ね。と。春。風。の。春。風。嫋。々。胸。

下知此趣者殆希。た。は。れ。て。ゆ。々。月。の。け。雲。去。月。明。

上之雲一齊吹去無な。ら。い。お。ほ。ろ。に。し。て。ほ。し。い。

復纖翳柔能制剛者な。ら。い。お。ほ。ろ。に。し。て。ほ。し。い。

之氣一去胸中復な。ら。い。お。ほ。ろ。に。し。て。ほ。し。い。

懸真如之月。中復な。ら。い。お。ほ。ろ。に。し。て。ほ。し。い。

顧前者之怒洵是兒戲。對此皎月如故意照我

不覺赧然却欲其朦朧一片嬌羞人々皆有

寥々短篇直賦其事真情真景兩極其微是豈求

然而然者哉。辞生於情情餘於采是以淡而有味

如此。夫至俚謠之妙百韻之詩萬言之文亦有不能

能反者。別離短歌曰。

君よ別れて松原ゆゑに松のはゆやら涙や

ら、

二句二十七言耳。而善言別離之情與征途之景。

不浮艷不枯淡。真情真摯如此。江淹別賦一千一

百五十六言亦不過擴此一短詠之意耳。可不尙

哉。但此篇膾炙人口。猶楓橋夜泊詩是以口其歌。

而不覺其妙。余故揭出于此。○松原歌與青柳歌。

同是賦體。其意異而其趣同。

花比曇

花の曇か遠山の雲かはなかはらゆき乃立杖上
 遠望墨堤之花糝糊一なをそよくふく春風に日暖
 白如雲如雪能繪實景なをそよくふく春風に日暖
 可人蕩浮寐さろふやさなみのこゝんかおもめも
 都鳥自得于風和波恬中扇ひやうこのざんざめく
 耳熱緩歌拍扇之聲内ぢゆかじれうちそ床しき
 載何者羨殺妬殺

墨堤花時光景如見評畢游心勃々。○東都泛舟
 之游在春而浪華游舫夏時爲盛予嘗有詩曰。

斜陽水影蘸江樓誰伴佳人晚上舟垂柳含烟

風亦綠浪華橋下聽嬌喉

予詩二十八字不如此歌結一句有餘韻遠矣

夏

落し文

いづかたへないてゆくらんほとぎす古起手引用
 欲流如聞杜鵑一聲啼過まくら山の山乃まよひみち綺柔情
 前山不言景而景自現
 夢飛魂迷寥々一句さくさびくはめづらいくいつ
 含蓄無限感慨意想

初音のこ、ち、ち、て 又點古語。簡淡高素。絕無餽釘之習。予於俚謠尤喜此等字句有情有色。
 わひひく、乃忍ひ寝も 一轉入自家境界。讀者始知自鴛鴦衾裡吐此錦字繡句來。可妬。
 つきぬなぞりか有明の 麗而不縲。中。 さつうないた
 かあひがらす 綺夢驚覺。始知啼鴉其不覺曉可知。使人妬殺。

通篇情思婉妙。絕去粉飾肥艷之習。詞藻華瞻。不嫌於纖。是歌之以情韻勝者。古歌曰。

さよふけてりたらい山のふと、さすひと
 り寢覺の床よさくかな

彼聞杜鵑於寒閨獨臥中。此聞杜鵑於鴛鴦衾裡。彼悽絕。此婉絕。而末句見貪眠不覺曉。人或謂之

俗。予取其有味外味。

こすの戸

う。さ。く。さ。い。思。案。此。不。か。の。さ。ろ。ふ。水。 浮萍泛々。隨水東西。人情亦有
 不。可。以。理。推。者。○。是。歌。倡。 女。蕩。婦。之。事。者。未。免。不。純。あ。ひ。が。う。き。よ。か。浮。世。が。戀。か。
 始。不。知。情。之。為。天。地。乎。將。世。界。之。為。戀。乎。人。道。 始。于。男。女。其。亦。性。情。之。天。地。戀。愛。之。乾。坤。哉。ち。よ。つ。と。死。ハ。
 たい。松。の。か。せ。と。へ。こ。た。へ。も。山。ほ。と。、。死。す。 向。下。
 松風問情事。松風不答。月やはもの、やるせな死。 聞。山。月。首。山。月。

皎々。月固無情。而使_レ人傷心不能禁。
 一やくよ字れく死おとあのちか
 ら傷心斷腸鬱積成病。依郎救護力。霍然。いつと手に手を
 如洗。此等處。筆不盡意。當局者自知之。
 なんにもいひぎ。不言故有味。味不可言。○不言ふたを
 して釣る蚊帳のひも。亦玉堂。何問帳之錦與布哉。

帳前微笑。髣髴如見。幄裏餘香。芬芳猶存。黃紬春
 暖。歡學鴛鴦。東山月明。妬窺閨閣。此等綺語。鐵石
 人亦豈不動心

夕顔

きのふまでながめはなもいつかにけふも
 我身となつぐさの紅顔。今朝自榮。松樹千年終朽。昨日之
 理。日にぞいほる。字さおもひ之夕。開畫調。花移めて
 憐と夕。りほのつゆのいのちとか糸。てまくれど、
 酸。凄入骨。欲らてまかなき夢の世や袖のかみど
 不泣。而不能。いらてまかなき夢の世や袖のかみど
 にかいをまもないてあひして山ほと、さす世浮
 如夢。我涙滂沱。香々啼血。獨伴一聲。そらよさへわたる月
 山。鵲極悲涼之語。不忍再讀。鵲聲在天末。直くもりがち
 乃。あゝ。みはてりなが。起。月字妙甚。直くもりがち
 なるむ糸の闇。太。観。映。エ、ま、ならぬとやほせか

い長恨如海意はやふけわさる鐘の音よまよひも
なれて死出此旅鬼氣逼人いそぐあゝろか夏の夜の
すゝしきかたの路も夢をてらとたまそれ三の
ともいひ迷霧已去痴夢無跡思極悽愴聲調極悲涼○意

此篇全然比體借花之鮮脆易凋者嘆人生之不可
可恃嗚々惻々誠足動人

獨寢に

ひとりねにこゝろさひをれ柴の戸ぞ正是佳人夢想之時
たゝく水鶏にさまされて柴門果有剝啄之聲もあや
それかと出て見れば是情人之慣習月にはづかしく我姿卒

開門寂無人影唯有皓月照我亂鬢耳姿字可猜

故人有約夜深不至風聲犬吠聳耳翹首洵有如
此者此等之歌不啻言男女之情短歌曰

もいやそれりと門に出て見れり河原柳の
影はかぞ

可謂簡而盡矣

戀一く

あひくがつい瘡となる。胸にさちこむ窓の

月。是亦不招之客いまやくるりと待つ身もいらで悶絶まよ

ぬ。一聲。不とぎ。非是移怒於物。聊慰吾無聊故不卓俗。

此與前歌同調同工。但彼嬌羞之語。此煩悶之意。是其所以異科

一聲は

一聲の月がなひたかほと、ぎす亦以古句起いつし

しらむみおり夜よまたねもやらぬさまくらや

香侵蔽膝夜寒輕聞雨夢未成羅おとこ心ひむこらい

帳四垂紅獨背玉釵敲着枕函聲おとこ心ひむこらい

おんなこ、ろはそ字おやない予借韓香篋詩答之曰

心力事粧臺不かたとき逢糸はくよくと紅袖不乾誰

眉淡ぐちなおもひどないでいるわいな自吟自泣無人會

凄楚纏綿筆赴於情

袖の露

くらいとのおへちぎりと人とのぬつらさよ
 秋は夜ぞながき。憂心仲々欲忘不能所以苦夜長也。あどに訪くる月
 の字らめし。秋夜待人不至故以月比郎此歌中之人月の
 あげがたのまくらよそふ松虫のねもたへく
 にいとさなぞ。此時枕頭蟲聲故牽おぎふく風のお
 とづれも。もしやとまちてわびしさの。於時露凝庭
坐看帶長轉ふちてまる糸れるでにかさかん蕙霜封階砌。
視腰細。
之錦君思出塞之歌。
相思相望路遠如何。

善寫蕩婦秋思。語淺思深。琢磨入神。○寫幽憤語
 不得激昂。而此以柔婉勝。歌謠獨擅之妙。

菊の露

とりの。の。聲。か。ね。の。音。を。へ。身。に。こ。み。て。
故無一。筆生澁。お。も。ひ。た。す。ほ。と。か。み。た。が。き。き。へ。
能。落。ち。て。な。か。る。、妹。脊。の。川。お。と。
知。處。巧。不。失。渡。る。ふ。ね。の。か。た。に。た。へ。て。か。ひ。も。な。
於。織。故。妙。不。失。渡。る。ふ。ね。の。か。た。に。た。へ。て。か。ひ。も。な。
胸。臆。刀。直。入。直。抒。沈。鬱。語。非。下。身。經。其。境。者。上。不。

き。世。と。う。ら。み。て。す。ぐ。る。層々聯珠、一氣呵成、不見斧鑿痕、
迹。顧盼有情。精緻無匹、お。も。ハ。ト。な。逢。ふ。ハ。別。と。い。へ。ど。
○無權與無効。國音同。も。愚。痴。に。如。此。痴。心。何。一。句。餘。意。不。盡。庭。の。小。菊。の。ろ。乃。
 名。よ。め。で。ひ。る。ハ。な。が。め。て。ら。し。も。せ。ふ。が。名。其。
已。艶。其。花。可。知。姿。婉。媚。嬌。葩。芬。芳。以。花。よ。る。く。こ。と。よ。お。
比。渠。終。日。相。對。冀。得。聊。排。悶。何。等。情。致。く。つ。ゆ。の。命。乃。つ。れ。か。や。に。く。や。何。畫。則。有。消。悶。之。種。夜。其。
花。上。之。露。浮。生。如。露。願。不。以。ま。ハ。此。身。よ。秋。の。り。せ。我。秋。風。吹。レ
易。遂。吁。彼。何。者。多。恨。多。憎。以。ま。ハ。此。身。よ。秋。の。り。せ。我。秋。風。吹。レ
日。冷。今。也。已。矣。其。亦。何。言。

此篇多情才子嘆不遇薄倖者。故沈鬱激昂。氣勝於辭。極言其不平於悽婉嗚咽中。前段語氣如飛

瀑急流滔々浩々巖觸玉碎。中腹以下。一頓徐々。顧盼左右容與而下。如山尽水出。風和波恬。其變化之妙。殆使人目眩焉。

秋の夜有引○此評嘗載于國民之友廿八号紙上有不可愛生者予未識其人讀此文而評曰卓見不得不服。今此錄以拜知己之言。

善愁多恨之人。見花而悲。向風而泣。而秋則白露冥雁。落葉凋籊。與夫月之皎々。蟲之唧々。目觸情

感者無一不為斷腸之根。薄暮五更。仰天顧影。觀物化代謝之如此速。而悟人生假幻之不可恃。誰有不卒倒者。况荒域謫客。寒閨思婦乎。是古人所以謂秋夜尤悲也。予天涯游子。落魄書生。時雖非秋。懷縈愁緒。閉門讀書。對月長吟。一夕俗謠秋夜歌。偶上心頭。反覆歌誦。陶乎心醉。遂取筆評之。亦是消閒餘事。遊戲文字。聊排吾悶耳。戊子秋初識于東京寂然山房。

秋。乃。夜。は。な。か。い。も。の。と。と。心。誰。謂。秋。夜。長。乎。一。聲。鶴。唳。情。迫。目。荒。涼。之。狀。ま。ん。ま。る。か。月。み。ぬ。人。の。お。ろ。か。も。實。是。宛。然。在。目。

月見
千里
寂然山房
あはれ



向隅者之言。情事門外漢。不解風流的痴話。若使其通情事。解風流而對此皎月。則將恨月落早。嘆事易違之。不遑。尙苦其長哉。罵言一番。却是唧々嗚咽。漸將白自家心事。而托他說起。ふけて。嬌羞可憐。○自是議論。不叙景而秋高月明。光景如見。ふけて。まて。と。も。來。ぬ。人。れ。此子果夜深待人。無限長恨。始知仔細。待郎之情。如此熾。而郎懷妾之念。如彼冷。雖不對秋風。秋。おとづ。月。其。奈。此。懊。惱。何。况。此。良。夜。乎。深。怨。長。恨。如。山。如。海。風。秋。おとづ。る。もの。は。鐘。バ。り。風。聲。犬。吠。聳。耳。翹。首。俯。待。仰。待。聞。然。寂。呼。嗟。此。時。美。人。意。阻。氣。か。ぞ。ふ。る。ゆ。ひ。の。糸。つ。起。さ。つ。指。屈。喪。懽。悴。骨。立。呆。然。茫然。か。ぞ。ふ。る。ゆ。ひ。の。糸。つ。起。さ。つ。指。屈。又。起。展。轉。反。側。憂。心。忡。々。可。想。見。美。人。眉。蹙。睫。濕。鬢。絲。掩。面。之。狀。○指。之。屈。伸。以。喻。身。之。起。臥。一。句。湊。合。わ。い。な。照。さ。れ。て。居。る。わ。い。な。慕。之。至。以。月。比。郎。戀。々。踟。躕。有。室。邇。人。遠。之。趣。而。香。深。人。靜。荒。寒。蕭。寂。光。景。描。出。如。見。嗚。呼。何。者。妓。童。使。此。可。憐。兒。懽。悴。如。此。可。妬。可。憎。

以月起。以照結。自然姿致。中段夜深人不至。屈指數鐘聲等。反映起手秋夜長字。恨其太短。文情緻密。處々承接。輕々極巧。是不求巧而自巧者。○此歌怨而不傷。哀而不淫。真情真摯。出以艷麗清透之趣。絕無鄙俚猥褻之意。一讀使人愴然魂消。抑我國風所謂戀歌者。概皆寄物托事。以述其衷。或興發于情。而歸于道。可以教人。臣。可以喻人。子。都鳥之什。橘花之篇是也。戀歌豈啻言男女之情哉。而世之木強漢斥以爲淫奔之媒。不可與言歌也。俗謠今樣。多是閨怨詞。往々有疵瑕。不可悉採。而

如此歌則情真辭雅亦可以比葩騷焉

霧乃雨

きりの雨か、りゑる。てにぬれつはめ。一意雕繪、ア
語々精絶、ア
 見やいやんせ鳥でさへ托物言情。慣用手段。馴れしとあろ
 をふりすて、しらぬ他國で苦勞して行賈逐利東西。是亦不得已者。
 兒とま字けてはるくと故郷へかへるさひの
 ろ人生之快。莫快。一。ほら。い。て。い。ない。かい。な。秋風。上。衣。
於久旅歸郷焉。

群燕已去。而良人未歸。乃感物而歌。語悲而思遠。

此歌勿々讀過似羈旅思鄉者再三玩味始知是
 非羈旅之歌而居人望夫之辭也感秋風之起而
 想君發楊子見燕兒之長而坐愁紅顏老望群燕
 之去而悲見少離別多詞意清麗中情悽惋如讀
 李白長于行予嘗與越中藥商同宿于碓冰嶺上
 一茅店藥商曰我輩八月出鄉明年二月歸鄉人
 生強半飄泊他鄉嗚呼人誰不重別離而這輩以
 羈旅爲性命故園寒閨之人愁水愁風展眉之日
 少而傷心之時多可不悲矣哉予亦天涯孤客遊

學十年。阿母在堂。遠勞慈懷。今評此歌。思越賈之事。而悲故山之遠。歸思勃然。淚潛々下。

萩桔梗

は。ぎ。死。き。よ。う。中。に。玉。づ。さ。し。乃。は。せ。て。何。等。情。致。何。
 源。氏。月。の。野。末。の。冬。の。さ。乃。つ。ゆ。秋。夜。涼。光。景。宛。然。紙。上。
 君。の。ま。つ。む。し。よ。と。ま。す。た。く。借。物。言。情。使。ふ。け。ゆ。
 く。の。ね。ま。か。り。の。こ。ゑ。種。目。却。開。翻。然。悟。入。之。地。戀。の。こ。

う。し。さ。も。の。か。い。か。水。落。石。出。雲。散。月。明。
 無。限。感。慨。一。句。喝。破。

秋何月而不清。月何秋而不明。多情之人。對此傷心。艸露吟蛩。踈鐘過鴈。孰不關情。牽愁哉。戀其如此。乎一語。剖析人情之微妙。來言寡意足。思深感長。○戀發於情。々生於中。而人々自有者。乃知戀愛之無人不有也。曰。彫管有燁。美人之贈。曰。琴瑟在御。莫不和好。此皆古之歌戀愛者。而此篇意其微妙。其語簡淨。不易多得。

時雨ふる

時。雨。ふ。る。淺。茅。か。原。の。夕。ぐ。れ。に。短。蓑。日。暮。瀟。々。雨。二。
 聲。三。聲。か。り。が。ね。の。の。樵。鴻。遠。吟。さ。よ。り。ま。つ。身。の。う。や。
 つ。ら。や。盃。下。托。游。鴻。戀。の。字。さ。は。い。中。た。へ。て。鶉。橋。中。斷。や。
 る。せ。か。み。ど。や。も。つ。れ。髪。唯。見。涙。い。ふ。に。言。れ。ぬ。胸。の。
 う。ち。勿。與。俗。語。恐。お。も。ひ。や。つ。た。が。よ。い。わ。い。な。任。君。思。量。の。
為痴人說夢

桃花臉裏汪々淚。忍到更深枕上流之意。○淺茅
 原今存其名而不知其處蓋今之淺草駒形橋場
 今戸等當時所謂淺茅原者秋風吹草吟蛩咽露
 荒涼寂寞光景往々見于今樣及俚謠而今則黃

塵市地歌吹如湧此亦桑滄之變也綺羅畢兮池
 館盡琴瑟滅兮邱隴平物之移有不可豫知者韓
 內翰詩曰車烏西兔似車輪劫火桑田不復論唯
 有風光與蹤跡思量長是暗消魂其名存而風光
 亦不可尋噫

浮世捨

う。れ。よ。す。て。の。れ。を。や。ま。せ。ま。い。發。如。是。蓄。生。お。ひ。も

りんきもわすれでいたが是忘耳未鹿のなく音と

死いて煩惱觸むかふがこひい未得佛果わいな再落火宅

あひたさよ見たさに來やんす誰謂煩惱即菩提乎

學遁於檀特習隱於東魯私淑於釋孔而交於諸

天善神亦奈此凡夫何苟一念悟實相則身臥藥

海而情在烟壑何必去妻子入深山之爲兼好出

家之說吾不取焉

君來すそ

きみ來せの闔へいらト柴の戸と出てのへ

り歸りて未見君子縁のは展轉反側乃遠乃遠ぎぬた絶絶

て來る風のおとづれて風聲鶴涙のそいて見れ

我より外に影ぞかさ絶悶

愁縈翠眉歛啼多紅粉漫

雪

花もゆきもそらへばきよきたもとかな紅花白雪
 拂去何有。况色不異。空物即是。色平。世之煩惱。漢愛紅賞白。自誇風
 流殊不知。花竟凋。雪竟消。物皆假幻。不足久恃。一喝悟入。殆似禪語。
 ほんに昔のむかひ乃おとよ長眠一覺。懷想昔日。こが
 まつ人も我まぢらん。當時情交猶密。以我思君。知お
 乃おとり。物思羽の氷ほるふすまになく音
 もさぞな。孤鶯獨悲。寒衾吞聲。其聲如何。乞煩さかきたに
 心も遠き夜半れ鐘さをもさひしき。獨寢の。况神魂
 遠寺夜半之鐘。隱々訪寒闌。豈不黯然。魂銷○遠字。神遠枕にひ
 與鐘遠。湊合極巧。不見遠人。聞遠鐘。亦是空谷梵音。

くあられの音ももいつそせきか糸て
 落るなみどのつらより。牽愁思者不獨鐘聲。空闌孤枕
 心匆卒所致。寂寥如此。我情つらき命はおしからねさ
 曷任潜々者涙。凝成冰柱。つらき命はおしからねさ
 と不堪。惆悵。戀しき人。を罪深くおもひぬ事のかな
 死亦何惜。戀しき人。を罪深くおもひぬ事のかな
 いさ。に。艶罪。獨使我嗚咽。不能措。望遂絶。願遂違。曷久戀戀之
 無限。を。て。た。浮世。乃山。かづら。為。是。所。以下。去。憂。避。塵。入。深山
 感。慨。を。て。た。浮世。乃山。かづら。為。是。所。以下。去。憂。避。塵。入。深山
 中。比。身。為。羅。也。重。言。厭。塵。之。意。而。怨。慕。之。情。愈。深。
 其辭如未。免。有。情。而。其。身。則。不。妨。脫。然。禪。境。

起手言今悟昨迷中腹說當時寒闌之恨而終叙
 所以解脫塵外結穴遂入大悟徹定之域其辭婉
 約其意悽涼是閨怨之愴絕者也語氣初緩中急

未段鏘然收響。何等絕妙好辭。古人曰。以色事他人。能得幾時久。世之輕薄兒。蓄妖嬌者。肝膽相許。異體如一。及其紅褪。則視之不啻路人。是所以有佳人薄命之嘆。而傲然稱學士太夫者。亦往々有此病。曰。結兄弟義。曰。患難不相救。如白日。一旦利盡。則見面不言。風漓如此。尚何尤。世之冶郎蕩子。哉。作此歌者。其亦失望之佳人歟。何其與妓王妓女之辭相似也。余嘗游京師。一夕買醉旗亭。會大雪。酒後一紅袖把絃歌。此歌一少女撥爐烹茗。窓皆玻璃。坐見飛雪。而一堂蕭寂。萬籟如死。余暝然

妓王



聞之。如入禪境。歌罷茗成。絃聲鑑爾止。今評此歌。昔游歷々。而身猶奔走塵埃。不能爲山中之蔦蘿。噫。

黑髮

く。ろ。り。み。の。む。す。ほ。れ。た。る。お。も。ひ。せ。は。而。艶。鬢。蓬々。亂。
自。是。天。然。而。好。對。と。け。て。ね。た。夜。の。ま。く。ら。こ。そ。却。是。後。日。
結。惱。鬱。ひ。と。り。ぬ。る。夜。の。仇。枕。前。雷。合。歡。之。夢。成。今。日。寒。閨。
見。之。始。ひ。と。り。ぬ。る。夜。の。仇。枕。之。恨。古。歌。曰。別。後。愁。多。未。見。

時。そ。て。は。お。た。い。く。つ。ま。お。や。と。い。ふ。て。惘。影。ぐ。ち。な

女。の。お。ろ。と。い。ふ。す。い。ん。と。ふ。け。た。る。か。ね。の。聲。

寂。寞。傷。神。遠。鐘。驚。夢。鐘。聲。豈。有。意。于。ゆ。ふ。べ。の。ゆ。め。の。け。さ

い。め。て。ゆ。り。か。つ。か。し。や。る。せ。な。や。在。夢。想。覺。來。歷々

不。可。自。判。歡。難。尋。つ。も。る。と。し。ら。で。つ。も。る。し。ゆ。雪。之。男。女

積。雪。滿。庭。直。賦。其。景。而。寓。意。其。中。是。賦。而。比。者。別。後。哀。慕。之。情。委。曲。纖。悉。穿。微。描。神。有。寒。蛩。依。草

凋。卉。待。露。之。趣。前。段。寫。來。縷々。紆。與。曲。折。末。一。句

許。多。含。蓄。醞。釀。有。味。的。是。言。盡。意。不。盡。者。

我物

わがものをのとおもへばりろき笠此ゆき引用古句調
 句善言世事人情都足自蓄有餘而特於情事比喻戀のおも荷と
 尤切這裏艱難都足自蓄有餘而特於情事比喻戀のおも荷と
 肩よかけ種無形的重荷負在双肩治郎無与財況此一
 者何辭妹がりゆればふゆれ夜の蕭々颯々而寒骨冷
 不辭焉若使其川風さむく千鳥かく但有相遇之樂是以
 公事則如何身遇蕭颯悲涼之境翻思情婦
 つ身に待儂之情經此中辛苦者蓋知
 妙其トつにやるせがないなな怨遙傷遠神往魂飛

信知尤物必牽情。一顧難酬覺命輕。

枯ほそる

枯ほそる冬のはらのむくの聲誰よころれて
 なくしやら老聳啣々ふくろに寒さひとそ糸や孤
 寒而情君のこゝろをわくしもの隔靴搔痒とけぬ一夜
 欲熾人室遠

空牀展轉懷悲酸。

雜

四乃袖

うさの中の習としはかくばり。曾把禪機消此病。破除纒盡又
 重。花の夕のちぎるとなるも。初のなさけの今。仇。一片之情。百年之恨。是風。いつそ逢絲バかうとこ
流多情之罪。奔女蕩婦之鑑。
 とを。ほんまあるまいよくなやつらや。然。真然。不若。慎。初。然。多情。
似病其奈天遣。仇にくらばる月日のほども。時光潜去。多情不自持。何。
 いので思のなみたの雨よいとくちなん四の。袖。憶涙因成恨。涙。夢游長從心游。
 月下冰翁不敢輕許。情天深機不可測。知。諺云因

縁不可知在何處。何者狂重。乃敢淫誘妖惑。賊。夫
 人子。以貽百年之恨。宜大書特書于情史。以俶春
 秋之筆誅也。

玉川此水

玉川の水よさらしたゆきの肌。冰肌玉骨。つもるく。絡神後身。
 せつのもろれうき。とけし島田のもつれがみ。偶。因。
飛語聯得深猜。相遇一笑。阻礙忽開。鬢。おもひ出さき。わ。垂。香。頸。粉。着。蘭。胸。鸞。鳳。戲。謔。可。猜。可。妬。

すれどに。語淺また來る春をまつぞへ一別悠々何日見。明年三月摘
時茶。

濃而艶。惱殺天下幾多風流才子。

鬢のほつれ

鬢。此。ほ。つ。れ。は。枕。の。と。が。よ。亂鬢偶作妬媒。それぞお

まへに字たぐられ異花何必重臺。願勿使情緒惡。くのいトやつと

めおやゆるしやんせ被頭不暖空沾涙。釵股欲分猶半疑。

是蕩子倡婦洞房之語。士君子之所恥言者。採錄
于此。素恐招罪尤。然天下未除盡此物。則此歌竟
不可亡也。暫錄待後日。以徵風俗之推移云爾

雪は月夜

雪の月夜と字たがなれ。月夜のゆれと字たがな
れ。よしの、山の山さくら。雲かとのみぢうたか
なれ。是興疑。まつにわびしら糸ののき。待字。あら

し乃おぎれおとづれも。もゝやぬゝとらたか
はれ。欲言此一句層々下疑字數句一氣吼成

此歌意思淺薄。無曲折。無含蓄。常套陳腐。不足誦。然比他卑俚者。字句稍清。

ほんに思へは

ほんに思へはきのふけふ。月日さつのも浮のそ
ら。情天月日最匆匆々人のろゝりも世のぎりも。おもそぬ戀

の二瀬川。思名思義。是謂之情。而痴情之所極。竟不可何はぬ。免棄名忘義。情海之大患。不可不戒焉。

其日は氣にかゝり逢へなくせつ。の種となる。眞人
情。之。ま。ら。い。い。不。さ。り。も。ゆ。ふ。て。愛。憎。之。變。エ。わ。じ。が。こ。ろ。い。なん。お。や。ら。解。尤。妙。

此篇多疵瑕。不忍誦。但其寫蕩婦痴情。雕繪入微。

別集

春山燒原四篇節錄二首

三。れ。山。と。い。つ。も。雨。く。も。か。ゝ。る。千。丈。の。お。き。へ。よ。
 ひ。び。く。山。ひ。こ。の。起。手。突。元。峻。峭。奇。抜。一。山。も。と。山。水。
 有。雲。烟。變。幻。之。妙。拔。一。山。も。と。山。水。
 水。ち。り。ぞ。つ。も。り。て。山。姥。と。塵。積。二。字。言。山。高。か。た。
 ち。は。晴。れ。て。は。る。け。し。さ。美。亦。湊。合。江。山。之。貌。一。み。ね。の。か。す。
 み。は。お。び。す。な。る。あ。ま。け。山。に。か。け。わ。た。す。山。よ。り。
 山。の。岩。の。し。や。晴。霞。搖。曳。よ。も。の。こ。き。へ。の。一。や。う。に。
 山。の。花。も。み。ぢ。色。こ。く。か。つ。の。と。見。れ。ハ。雪。ふ。り。
 煙。雲。變。幻。紅。綠。開。落。一。四。季。お。り。一。乃。た。ハ。む。れ。に。つ。
 寫。得。簡。淨。盡。態。極。妍。一。四。季。お。り。一。乃。た。ハ。む。れ。に。つ。
 瀟。音。是。鼓。白。雪。是。粧。な。に。は。の。事。か。の。り。な。ら。ぬ。よ。い。
 自。然。音。樂。自。然。靚。粧。な。に。は。の。事。か。の。り。な。ら。ぬ。よ。い。

あし引の山字。山めぐりするおもし。や。調。高。聲。遠。

雲。鶴。舞。ま。つ。に。字。れ。し。き。花。の。か。ほ。情。韻。漸。婉。や。が。て。ふ。

さ。り。が。み。つ。み。せ。つ。戀。ぢ。つ。も。り。て。ふ。ち。せ。川。は。

ら。ぬ。と。み。な。さん。と。不。ん。に。む。す。ふ。の。か。み。さん。と。

ね。り。ひ。り。と。吐。一。場。好。諧。謔。任。口。ご。ふ。で。も。皆。さん。す。

い。ト。や。も。の。は。づ。か。し。や。老。と。わ。を。れ。て。た。の。ら。み。

の。我。子。を。ま。ね。き。て。山。め。く。り。山。姥。忘。老。且。舞。且。歌。怪。童。

實。是。千。古。山。又。山。に。山。め。く。り。山。從。母。熊。侶。鹿。友。跋。山。涉。水。

成。に。け。り。仙。蹤。遠。矣。有。高。山。流。水。古。調。獨。彈。之。趣。○。長。歌。以。聲。調。之。間。

雅勝。而意思亦稍優美。酒酣。絃鼓并奏。緩歌慢舞。
武夫健卒。亦當魂迷肉消。

黒木賣

お。そ。へ。て。秋。乃。な。か。め。や。花。も。み。ぢ。
お。も。ひ。の。あ。れ。は。こ。そ。君。ゆ。へ。不。ん。に。八。瀬。の。里。嗟。
峨。や。せ。り。や。う。の。野。邊。の。色。
字。あ。る。い。や。若。さ。身。に。も。あ。さ。な。ゆ。ふ。な。に。も。此。思。
謙辭。村嬢。自「賤」がや。
有。村。嬢。之。語。氣。

ひ。通。貴。賤。戀。乃。お。も。荷。え。さ。り。と。い。つ。ら。や。牛。乃。つ。な。
誰。無。情。

引。男。七。夕。空。に。志。ら。れ。ぬ。い。も。せ。で。と。
い。く。か。い。ん。せ。是。な。ふ。戀。さ。り。り。妙。真。卒。
語。卑。而。り。情。深。

天真爛漫。妙在不假粉飾。

傾城無間鐘

思。ひ。よ。は。さ。ふ。し。た。花。の。さ。々。事。と。身。に。ぞ。志。ら。る。
、。う。や。つ。と。や。故。有。藥。い。か。に。な。ら。ひ。志。や。つ。と。め。ト。
海。之。名。

やとて。もい。や。なき。やく。に。も。あ。は。ね。は。な。ら。ぬ。や。
 不。嬌。情。悲。而。口。笑。春。夢。困。騰。々。展。轉。い。と。と。男。の。あ。ま。ま。な
 能。起。嗚。呼。苦。海。無。活。如。來。乎。否。い。と。と。男。の。あ。ま。ま。な
 ら。ぬ。い。ぬ。び。の。何。い。づ。や。手。く。た。の。枕。む。り。な。事。で
 も。と。ふ。や。ら。か。こ。い。願。情。緒。融。怡。纔。慰。辛。苦。一。な。と。み。か。さ
 な。り。樂。し。む。中。の。あ。い。ぬ。つ。ら。さ。に。な。こ。が。れ。し。よ
 り。も。何。ふ。て。別。る。鐘。の。聲。こ。か。れ。て。あ。ふ。て。あ。ふ
 て。こ。か。る。か。ね。の。こ。へ。己。嫌。刻。燭。春。雷。短。最。恨。嗚。珂。曉。鼓。催。い。つ。か。く
 る。こ。と。は。な。れ。て。不。ん。に。不。ん。の。め。う。と。言。る。
 な。ら。ば。い。ま。い。む。か。し。の。か。さ。り。ぐ。さ。此。縁。到。死。須。誓。相。尋。

曉鐘晨鴉。倡婦宿世之深讐。近世取鐘鑄砲而上
 野淺草二山猶挂洪鐘。撞破都門幾處金閨繡戶
 之綺夢。或恐才鬼妖魂有積恨成崇之日。不知誰
 濟度之者。

山賤 (長唄)

けにやくすりと菊の水。おなトながれのおちあ
 ちの老とやしあふ瀧川のながめいづれおも

い。ろ。や。樵翁立杖。觀。養。一。バ。一。也。を。ら。ひ。居。たり。い。が。

山。ほ。と。老。瀑。稱。其。奇。絶。つ。れ。て。今。一。お。る。の。き。り。ま。ほ。

一。樵翁亦解風流韻事者。如。や。す。む。お。も。に。に。か。た。と。

か。一。さ。や。け。き。月。一。か。け。字。は。を。拾。薪。在。肩。山。月。八。十。

路。此。な。み。の。花。も。さ。き。の。へ。る。點。年。腰。曲。如。山。ち。と。を。

う。く。に。そ。ろ。く。と。た。と。り。く。て。歩。行。く。徐。々。下。山。一。步。一。喘。

一。憩。一。が。若。い。と。死。や。な。何。く。難。所。の。山。で。も。い。

か。な。る。う。み。川。かり。と。も。ほ。ん。に。く。千。里。一。飛。時。之。舊。

壯。有。天。馬。奔。空。之。概。亦。是。據。鞍。今。で。い。去。と。い。く。杖。が。か。

顧。盼。者。流。麗。中。插。真。卒。語。妙。今。で。い。去。と。い。く。杖。が。か。

け。れ。は。な。ら。ぬ。へ。く。懷。昔。之。語。氣。諄。々。逼。真。今。い。か。へ。

ら。ん。吾。庵。へ。悠。然。

此翁白頭眞可憐。伊昔紅顏美少年。可謂絶妙之。

樵唱。

高尾殲悔

ほ。み。志。と。也。と。う。高。尾。殲。悔。け。と。川。都。鳥。も。と。も。は。こ。も。す。の。ろ。こ。じ。たり。名。も。か。つ。か。し。さ。

に。身。に。ぞ。い。む。深月暗行荒墳青冢之間「ふ。し。き。も。み。
 ち。の。か。け。ろ。い。て。つ。か。の。う。ろ。に。す。く。と。高。
 尾。が。す。が。た。こ。れ。ま。て。あ。ら。い。て。い。ぞ。草。魂。依。
 荒。絶。愕。絶。も。み。ぢ。葉。の。あ。せ。ば。に。し。ける。夏。木。立。は。る。
 へ。む。か。し。に。な。り。け。ら。し。昔。日。榮。華。世。わ。た。る。中。乃。し。
 な。く。に。我。の。親。は。ら。か。ら。の。と。先。に。沉。み。し。戀。乃。
 ふ。ち。う。の。み。も。や。ら。ぬ。流。れ。の。う。き。身。字。い。ぞ。つ。ら。
 い。づ。つ。と。め。の。な。ら。ひ。美。人。皆。為。孝。沈。淪。為。不。孝。浮。蕪。海。幾。千。
 辛。酸。無。不。嘗。盡。其。身。一。烟。草。の。ん。で。も。き。捲。る。よ。り。の。ぞ。
 可。賤。而。其。情。可。哀。者。泣。て。あ。か。さ。ぬ。夜。半。と。て。
 が。と。ぞ。ら。ぬ。う。す。け。ふ。り。泣。て。あ。か。さ。ぬ。夜。半。と。て。

な。な。人。の。な。か。め。と。か。る。身。は。ほん。ま。辛。苦。ま。ん。
 く。の。苦。の。せ。か。い。酸。凄。之。語。不。忍。多。讀。嗚。乎。天。之。生。人。欲。苦。
 數。固。不。足。怪。人。生。四。季。の。も。ん。日。の。お。ぐ。る。ま。や。ま。づ。
 到。此。天。道。寧。論。は。る。の。花。の。も。と。た。お。り。し。枝。を。た。の。し。み。て。と。お。
 に。な。が。む。る。春。此。風。そ。よ。り。く。と。花。吹。ち。ら。す。ち。
 ら。り。く。と。櫻。の。の。ほ。り。野。山。ぞ。う。つ。を。里。け。お。れ。一。
寫。得。春。光。娟。麗。淡。蕩。不。可。無。此。變。化。夏。の。明。ほ。の。あ。り。あ。け。の。ほ。ぞ。ん。の。
 け。さ。と。さ。へ。づ。る。は。し。で。の。た。ぞ。さ。や。め。い。と。の。鳥。
 と。鳴。あ。り。す。流。れ。て。血。し。ほ。の。も。の。色。さ。つ。れ。さ。
 み。た。れ。ふ。ら。れ。く。ふ。る。く。く。ふ。る。夜。は。物。を。思。

は。す。る。か。で。の。鳥。か。や。字。ら。め。じ。や。秋。此。夜。中。に。ほ
 た。ん。花。の。と。う。ろ。う。お。さ。り。の。一。ふ。む。に。の。お。る。あ
 け。さ。と。し。の。が。ん。と。大。門。口。の。た。そ。が。れ。や。い。さ。す
 、む。し。と。思。出。を。透。徹。句。々。流。麗。字。々。つ。ら。い。つ。と。め。の。そ
 の。中。に。か。い。い。男。と。ま。ち。か。ね。て。く。れ。ま。つ。む。し。乃
 思。ひ。出。ま。む。し。此。聲。々。か。い。ゆ。ら。む。わ。れ。が。す。み。か
 の。冬。さ。葉。に。す。た。冬。つ。ゆ。と。ま。く。ら。に。せ。い。ら。は。お
 ち。よ。婉。麗。な。い。て。よ。と。の。つ。ま。ほ。し。う。ま。と。の
 恋。ひ。も。ま。さ。は。た。お。り。む。し。よ。つ。ゆ。と。ま。く。ら。と
 せ。は。ら。は。お。ち。よ。な。い。て。夜。と。の。つ。ま。ほ。む。そ。ふ

い。と。乃。で。戀。ひ。し。た。む。た。お。を。む。し。よ。幽。愁。暗。恨。托。虫。發
 舞。ひ。る。は。も。の。う。さ。く。さ。の。か。け。あ。、の。な。し。や。な
 くる。ま。や。雪。の。は。た。へ。に。な。さ。け。な。く。あ。ほ。り。の
 や。い。ば。よ。つ。ら。ぬ。か。れ。さ。な。が。ら。ふ。ゆ。の。は。つ。の。ん
 の。く。る。し。み。ふ。の。し。も。の。が。た。り。修。羅。妄。執。墮。落。寒。地。獄。
 秋。至。此。點。雪。以。補。四。季。は。や。時。來。ぬ。と。い。ふ。こ。へ。も。ふ。る。讀。去。慄。然。○。前。寫。春。夏
 節。物。繁。簡。尤。妙。ひ。こ。な。き。身。に。し。み。こ。た。り。と。ろ。く。あ。た。と。う
 ら。み。と。な。さ。け。の。お。も。ひ。お。ひ。先。ぐ。り。く。し。ん。と
 う。い。な。づ。ま。す。さ。ま。ど。く。む。さん。や。高。尾。は。世。乃。ひ
 と。の。思。ぞ。か。け。し。な。み。た。の。雨。は。ん。ぐ。く。は。ら。く

くくふりか、れは身にいみたへて小のけに
 よれば刃のせえにほんなるの犬もあつまりさ
 ほとならいて飛のるおは情なやまの鳥
 はいとならいてはとた、まなこをぬおんと
 まひさがる實におそろいきものがたり末段寫入
 大地獄奇
責之狀。調急音迫。讀者神
 悸氣愕。有下身座魔廳之想。

借佛說說煩惱之果怨恨之報字々鬼氣語々火
 燄惡鬼羅刹躍于紙上而流血斷骨現于言表高
 尾芳顔麗貌艷名動一世上自公侯下至卑隸僕
 卒無不聞名而魂飛見貌而肉消者而死爲幽鬼。

魂依凋草骨曝荒野雲鬢花顔倏忽幻滅假令無
 地獄之苦宜悟人生之不可恃一休臭骸之喻以
 諭蕩子亦旨矣哉○音調初緩末急緩如幽鬼之
 行急似驟雨之至極聲調變化之妙。

燕子花

謹「おたみの花のいまこゝに」ありは乃あとな
 へどてそりたつばと花むらさき乃ゆありとて

參河八橋以燕子花鳴在原業平東下至此咏歌事見伊勢物語舞妓衣冠粧業而上塲緩歌慢舞殆足使人想見當時風流焉

かたみのかむりからころも身にそへもちこ

との葉もちさり一人のかぎくに敷唐衣之歌よ

しもおもひのなほゆの志のふやまこのびて通

ふなりひらのすがたのいまに見おはすおもか

はいとこ千古風流好漢主今歌すれぬ心やなこひ

しゆかきさありまよかたるもなほかきよと

ぞのいといと色こそ字き世なれ情夫能事たのいむ

もはやむかきおとこの名をとめいかきはは

古今咏燕子花者何限而獨業平之なかめ玉へをみやく

人まことの花の精かりと見へつかくれはなり

にほり花神感于知己而舞以誇榮於人可謂奇矣

燕子花之艶在五中將之風流湊合爲一篇之好

文字千古韻事竟属此人

秋の巢籠

世よつれて字きと道づれ小男鹿れつまあうよ
るべきたえなれ起手己身すがらやつすふうぞく

にせめて終やもる月どにもあわれまくらに訪
 も来き言深恨於婉約中妙水のなかれに立つくす姿もかほ
 も取なりもすて、こそあれうかむせも思ひあ
 ふたる出立に己知這裏辛思ふおとかなはねバこ
 そ。浮。世。と。い。い。の。き。か。た。ら。ぬ。わ。が。心。う。き。世。に。な。
 ら。ふ。ぎ。り。此。道。數。句。精。絶。非。老。い。か。に。そ。れ。ぞ。と。す。む
 月のしづがふせやに事とふもわきてへたてぬ
 花の香のそど、ぬ里のなれどもあ、ま、な
 ちぬしやバせかい月何村不明花何里不香花月洵可愛
 一。ふ。か。い。ね。が。い。に。あ。ぎ。が。ほ。の。つ。ゆ。も。ま。た。ひ。ぬ。字

さかたのあわれ一言きくかさね七重も八重の
 言の葉に臚列節物かなぬきやうの吉田せん神
 はおるまかさど先かきさこへぬ糸の三みせん
 に。お。と。は。り。な。ら。ぬ。か。よ。ふ。神、文如きいて冬どん
 せ。一。ま。ト。に。鳥。の。そ。ち。ね。は。は。か。る。と。も。關。は。ゆる
 さぬ秋のろら鴈此さよりを又もまつらん結得悠
 韻有

調變意轉錯落成章。長歌往々有此體

染糸

むらさきの色は心ろはあらねどもふかくもお
 もひそ光絲の得欲燃。絲乃みたれやほさけぬう。
 き身。巧妙何の因果に。いやに來て。斯子。是亦天也。
 いきてそわれてまゝになる身かなんぞのやう
 に。人生不如意。十常居。去とは神にたのみをいふ
 てえ見たらまゝになる身か何ぞのやうに。重言不
 絶。去とてはこほれやすさよ露の玉。紅淚一滴。自五
 臟六腑。逐出來。

措辭綺麗與題相副。

評 閨怨畢

明治二十一年十二月 日印刷

明治二十一年十二月 日出版

板 權 所 有



著 者 西 村 時 彦

東京府神田猿樂町二丁目九番地

發 行 者 水 田 吉 太 郎

愛知縣名古屋區本町六十八番戶

印 刷 者 田 中 有 文

愛知縣名古屋區傳馬町七十番戶

發 賣 所 東 雲 堂

名古屋區本町五丁目

1537

1537
Lito

